

萩原元昭編著
『個性の社会学』

学文社 1997年 193ページ

片岡徳雄（土佐女子短大）

本著は、萩原元昭教授の群馬大学ご退官を契機に、「先生とかかわりの深かった」7人の方との共同執筆による労作である（以下敬称略）。いうまでもないが、このテーマは、バーンスタイン学説の紹介を通して個性教育に大きい業績を挙げた編著者を記念するに極めてふさわしい。と共に、「個性とはなにか」「個性尊重の教育実践の今後はどうなるか」に深い関心を持つ教育界の理論家と実践家にとって、とりわけ「教育的スローガン」としての「個を生かす学級づくり」（p. 105）など安直に口にしてきた1人である私にとって、様々に教えられる内容がある。

8章からできている本書の構成は、次のように読み解くこともできる。1章（萩原）と2章（石戸教嗣）はそれぞれバーンスタインとルーマンに拠りながら、個性及び個性教育の理論を展開する。そのあと、3章（住田正樹）は仲間集団論、4章（結城 恵）はS幼稚園での観察、5章（古賀正義）は学級集団論、6章（岩瀬章良）は小中学校教師の実践報告集、7章（飯田浩之）は中学校教師＝生徒関係の調査、そして8章（永井聖二）は高校教育改革論の変容、をそれぞれデータに個性形成の実際を論考したものである、と。たしかに「あとがき」（永井）にもあるように、各章のトーンには差があり、少し不揃いな点もあるが、それぞれに鋭い示唆がある。そのいくつかを列記すると…。

現在の仲間集団での個性化過程は、仲間の縮小化と喪失化によって、親密でしかも厳密な「社会性の裏づけを欠いた、狭い境域の薄っぺらなもの」（p. 75）になってきた。

S幼稚園の教師たちが幼児に関わる姿をみると、集団性の「高い子の個性は育成されるが」「低い子の個性は抑制され」（p. 96）、さらには逸脱的な子のもつよさは無視される（p. 97）。

学校の学級集団は個性化教育を進めるために、「弱い分類と弱い枠付け」をはじめとして、学校文化そのものを転換させねばならぬのに、学習の個別化・個人化が中心になっている（p. 113）。

教師の実践報告ではしきりに「個を生かす教育」が言われるが、その子ども理解は具体的ではなく漠然としていて、子どもを「みな同じ」とみなし、既定のスケジュールによる「適応」を強く求める（p. 137）。

中学の教師＝生徒関係においては、カウンセリング・マインドよりも依然として、集団協力や努力重視という伝統的指導観が維持され、それは個別的なかわりと配慮を教師に求める生徒の期待からずれる（p. 159）。

高校教育改革論が「多様化」から「個性化」へ変化したいきさつをみると、多様化論には「全体」が前提された中に「分化」があったが、個性化論には「個別」に関する「差違」しがなく、それでは高校教育の社会的機能を失う。「個性」という概念に教育的価値を置き過ぎ

て」はいないか (p. 186)。

このような個性化ないしは個性教育の問題点を、どう考えたらよいか。住田のいう「個性化と社会化とは縊り合わさって人間形成過程」全体を構成している (p. 57)、という根本に立ち戻ってみる必要があるように思う。じっさい本書においても、萩原は、個性とは「意思決定の過程において、他者との関わりで自由な選択力を持つその人独自の行動的ないし能力的特性」(p. 14) であるとし、このような個性の形成メカニズムを、他者を受容し他者が自立できるよう援助する「アコモデーション」(p. 31)、あるいは石戸は、ルーマンのいう「オートポイエシス」すなわち「環境に適応しながら自己を構成する要素を再生産する」もの (p. 38)、にそれぞれ求めている。ここに言う「他者とのかかわり」「環境に適応」といったところこそ、個性化と社会化の分ち難い実態があり、そこに今後いつそのメスや実践の工夫が求められることを、本書は教示している。

たしかに、私たちの教育的課題「個性尊重の教育」は一つの「教育的スローガン」にすぎぬかもしれない。しかし、個性尊重と個性教育とを求めざるをえない、歴史的社会的文脈は厳としてあり、けっしてそれは幻想ではない。「個性とはなにか」「個性形成をどう進めるか」本書はこの点に関する「リーディングス」ないしは「テキスト」として、理論的にも実践的にも私たちが「個性の社会的原点」に連れもどす書ということができらるだろう。

今津孝次郎・樋田大二郎編

『教育言説をどう読むか』

新曜社、1997年

永井聖二 (群馬県立女子大学)

本書は、今日の教育議論に関わるさまざまな子どもと子どもの指導に関わる言説が検討され、解き明かされていく好著である。ここでいう教育言説とは、人々を幻惑する力を持つ、認識や価値判断の枠組みとなる論述を意味するが、具体的には「個性尊重」「カウンセリングマインド」「大人と子ども」などに代表される、殺し文句になったり、一定の行動を促したり、攻撃したりする論述を指す。それがどんな使われ方をして、いかなる役割を果たしているかを論じた本書の各章は、われわれが往々にして自明視しがちな言説の意味を改めて問い直して新鮮な刺激を与えてくれる。アリエス以来の、大人たちが子どもを見る視点の対象化という側面からの子ども論との関わりからも、本書で取り上げられた教育言説の検討は、きわめて示唆的なものと言えよう。

たとえば、「いじめは根絶されなければならない」という言説を取り上げた第8章の「教育言説において全否定は『教育の現場にあるまじきこと』という形で、現象の『非教育性』ゆえに事情の如何を問わず否定される。そこでは人間どうしの相互作用がもっている複雑性や、相互作用の生じる文脈の個別性などは捨象され、『教育』『教育的』という絶対不可侵の価値に相反するものとして一切が否定される。しかし私たちはこうした複雑性や個別性のな